

報 会

第 6 号



インドネシア、ロンボク島の風景（曾田菜穂美撮影）

京都大学地理学談話会

1 9 9 5

がんばらなあかんで、院生！

石川義孝（昭和50年卒）

4月初めに、大阪市立大学文学部から京都大学文学部に移らせていただきました。1981年4月に助手から奈良大学に転出して以来、14年ぶりの母校です。感慨はいろいろありますが、ここでは、4月6日に院生諸君に歓迎会を開いていただいたさい述べたことを、繰り返したいと思います。

近年、私は、京大の院生に強い不満、いや怒りを感じてきました。まともな研究業績をほとんどあげていないのに、本人達はその事を自覚していないし、それにもかかわらず、各地の大学に次々と就職していったからです。わが国では修士論文が研究者としての出発点ですが、それを閲読を経た論文として学会誌に発表するのがやっとで、それで満足し、それから先の努力を重ねることを断念している人があまりにも多い！ 修論を活字にすることを怠ったまま大学に職を得て、平然としている人さえいます。地理学教室のスタッフには、これ以上はないという程の強力な先生方が、従来揃っていたにもかかわらず、です。

教員はまともな研究者に育って欲しいという思いをもって、これまで院生の指導をしてきたはずですが、肝心の当人たちは、研究職についた時点から、実質的に研究を放棄してしまったと理解されて仕方のないような「業績」しかあげられないという状態に陥っています。もしわが国における人文地理学の相対的な水準が、近年低下しつつあ

るという見方があるとするれば、その先陣役を演じてきたのが、京大の院生あるいはそこを出た若手の人達という解釈さえ可能であろう、と私は考えています。

いま、一つの事実を挙げましょう。昨年秋に私は、日本の地理学研究をリードしているのはどのような大学かを、知り合いの外国人地理学者に知らせてやりたいと思い、ある調査を行いました。1990-93年の4年間を対象として、わが国を代表する7誌（「地理学評論」・「人文地理」・「経済地理学年報」・「歴史地理学」・「地形」・「第四紀研究」・「地学雑誌」）を取り上げ、論説に1.0、それ以外のカテゴリーの論文に0.6というスコアを、さらに海外の主要雑誌に掲載された論文には2.0というスコアを一律に与え、著者の所属大学別にそのスコアを合計しました。そして、地理学教室の規模の影響を除くために、教室の教員数でその合計値を割って、research productivityの測度としました。データ処理の細部については深く検討せねばならない点が多々ありますが、ともあれ結果は、1位東大、2位名大、3位大阪市大、4位東京都立大、5位広大、の順でした。ちなみに、京大は9位でした。

この調査からはいろいろな興味深い事がわかりましたが、特に強く印象に残ったのは、世間的な大学の評価——そのさいには時間の不足から、蔵書数や民間財団から与えられた研究費総額といったデータしか用意できませんでしたが、具体的な指標としては、かの悪名高い偏差値でもいっこうに構わない——と各地理学教室の生産性のくい違いでした。この評価に比較して、生産性の順位が上にズレているケースは、

当該地理学教室の健闘を意味しています。その逆は、潜在的な力を出し切っていない、いわば看板倒れのケースです。後者の、一般的な大学の評価に比較して、生産性の順位が下にズレている最もひどい例が、京大でした。スコアにカウントされた院生（発表時点の所属）の論文は、対象とした4年間で「人文地理」に掲載されたわずか1本の論説のみ、という実にひどい結果でした。10位以内に入っているからマアマアではないか、との意見もあるかと思いますが、この測度は、順位規模曲線に近い分布をするので、9位は20位や30位とたいして変わらないという点に御留意下さい。ともあれ、以上が、わが国を代表する大学という世間的な評価を受けている京大の地理の院生の実態です。

以上のような「惨状」に対しては、その頃、バブル景気のあおりで優秀な学生が院に進まなかったとか院生数が減ったとか、などの説明が可能かもしれませんが、それは、あくまで部分的な説明にしかならないでしょう。バブル景気は、全国の諸大学を同様に襲ったからです。1989年以前に京大はまともであったかと言えば、同様な調査は行っておりませんので、確実な根拠に即した議論をここではできませんが、おそらく到底そのようには考え難いと思われます。

要するに、根本的な問題は、院生がまともな研究をしていないという点に尽きる、と私は思います。院生とりわけ博士課程の院生は、わが国を代表する学会誌に次々と論文を発表し、その実績に基づいて、自分の将来を自力で切り開いていくしかない事を、肝に銘じていただきたい。さらに、世界の地

理学の研究・フロンティアは、目まぐるしく動いています。それに何らかの貢献をすることも、将来の大きな目標の一つとなり得るでしょう。しかし、そのような貢献は、それまでの着実な論文の積み重ねなしには、到底実現が難しいと予想されます。

今後、以上のような方向に向けて、私にできる範囲内での支援は、惜しまない積もりです。院生と教員の間には、指導される側と指導する側という一応の形式的な差異はありますが、研究者という点では、全く同じ土俵の中にいます。同じ研究者として、院生の失笑を買うことのないよう、私も襟を正して頑張りたいと思っています。



若狭湾

+++ 講演会の報告 +++

1994年11月11日文学部博物館において談話会秋季講演会を開催、河野通博先生と豊田哲也さんに発表していただきました。その内容を以下に簡単に報告いたします。

中国のエネルギー生産事情

河野通博（昭和16年卒）

中国は従来秘密主義といいますか、統計の内容を公表しないやり方をとっていたわけですが、1981年になって一級行政区（省・自治区・直轄市）ごとの統計を公表するようになりました。さらに、1990年には、それ以前の分についても遡って公表され、これを利用して、新中国成立以来、現在に至るまでの一級行政区単位の分析ができるようになりました。ただし、発電量については火力か水力かの内訳が今なお完全には分からないので、その点の曖昧さが残っていますが…。今日は、そのデータに基づいて、新中国のエネルギー生産事情についてお話したいと思います。

中国の主要なエネルギー資源は言うまでもなく石炭・石油・天然ガス・水力です。ですから今日はこれらの統計を見てゆきますが、そのほかにも地熱（ラサ近くのヤンパージェンで）・風力（内モンゴル自治区他）・潮力（広州湾他）・太陽の光熱（チベット高原で計画）・原子力（上海・シェンチェン近くで）も一部では利用が試みられております。なおメタンガスも一部では発電に利用されているようですが、小規模なものであり、専ら家庭用とし

て利用されているようです。ということで、石炭・石油・天然ガス・水力について、統計を見てゆけばよいかと思います。

92年度の一級行政区ごとの石炭生産統計をみますと、トップは山西省・河南省・黒竜江省となっており、日本の地理の教科書で大炭田地帯とされる河北省・遼寧省はそれぞれ7、6位でしかありません。開放当時は遼寧省が1位だったのですが、その後再編成を経たということです。

同様に原油統計を見ますと、大油田をもつ甘肅省・新疆省の順位が必ずしも高くない。トップは黒竜江省・山東省・遼寧省となっています。ここでも日本の教科書とのずれが見いだされます。

ちなみに新中国成立以後の原油産出量累計の省ごとの順位と、最近の産出量の省ごとの順位は食い違うところが目につきます。石炭にしても石油にしても、日本で常識とされる省の生産順位と、現在の実際の順位とはかなり違っているわけです。

水力発電にしても同様のことがみとれます。日本の教科書ではおなじみの大型ダムをもつ河南省・甘肅省はだいたい順位が低く、小規模ダムを数多く持つ湖北省・四川省・湖南省がトップとなっております。福建省も事情が似ておりまして、日本の地形と似て短くて急な河川が多いわけですが、農協発電とも言うべき小規模なダムがやはりたくさんあります。

次に新中国成立以後の年次ごとのエネルギー総生産量の推移を見てみましょう。60年代前半には大躍進政策の失敗によって、そして後半には「文化大革命」の混乱によって、石炭・火力

発電の落ち込みが見て取れます。それに対して80年代初めみられる伸び悩みは、意図的な生産調整に由来するものです。このような事情が、一級行政区ごとの統計数値に明瞭にあらわれているわけです。

石炭については、一級行政区ごとの生産量が公表された80年代以後の数値をみてみます。山西省がトップに来ることは変化ないわけですが、かつて重要であった遼寧省・河北省が「開放」以後伸びなやんでいる状況に比べて、内モンゴル自治区の急速な増産が目につきます。いわば後進地域が先進地域を追い越そうとする現象が、今みられるわけです。

原油について一級行政区ごとの産出量をみます。油田の開発は、50年代の甘粛省・シンチヤンウイグル自治区など内陸部での開発に始まるものの、海岸部の工業地帯に近い油田が求められた結果、60年代以降大慶・遼河・勝利・渤海・中原が、さらに内モンゴル自治区で開発されてゆくさまが、統計数値によく表れています。60年代は石油化学工業が伸びた画期にあたる時期であり、そのころ初めて訪中して私も、レインコートを目にして驚いたものでした。

なお今後の油田開発としてはクリムや上海沖合の海底油田などいろいろな場所で試みられています。しかしどこが中心になるのかはまだ分からなくて、次の油田開発が問題として残されています。

火力発電所の推移をみますと、従来の工業都市中心の立地から、石炭産地での立地へと傾向が移りかわっていることが分かります。これを「山元発電」と呼んでおります。石炭を鉄道で都市

に輸送するよりは、送電した方がいいではないかという理由に基づいているようです。鉄道による石炭輸送能力を超えるだけの電力需要が生じるようになり、石炭を炭坑にいたずらに積みおく事態がしばしば発生したためであります。

なお炭坑は、大企業向けといいますが、その全てが都市や大工業地帯に向けられているわけではありません。

「地方炭坑」には中小企業や一般民衆の生活に用立てられるものかなりの割合で存在しています。このような炭坑が数多く存在し、民衆の生活を支えているということも忘れてはならないことだと思います。



ロンボク島（インドネシア）

地代論の展開と都市の空間構造

豊田哲也（昭和62年卒）

今日は地代論と都市の空間構造というテーマでお話しし、皆さんから御意見を承れればと思っております。現代日本の都市問題の根幹には異常なまでの地価の高さがあります。ここでは特に住宅地について、古典的な地代論をふまえた上で、都市経済学での議論をにらみながら、地理学的な立場から地代形成のメカニズムについて私なりの整理をしてみたい。他方、京阪神大都市圏地域を事例として、地価の空間構造とその変動をどのように説明したらよいかを考えてみたいと思います。

理論的な出発点として着目すべきポイントは二つあります。都市地域においては、なぜ人口密度と地価の分布は同じような距離減衰パターンをとるのか。この形というのは、空間的相互作用モデルでも全く同じ構造を持っているわけですが、あくまでも調べてみた結果がそうだったということであって、原理的な説明を含んでいない記述のモデルです。これら現象の類似性をいかにして説明するのが第一の問題となると思います。もう一つ、現代日本の経済学で広く承認されているファンダメンタルズ・モデル — 大雑把に申し上げて、地価は地代収入を一般利子率で割り引いた現在価格として成立するという一つの定式です — これがどこまで有効であるのか、例えばかつてのバブルのような状況においてはどうかというのが問題の2点目であります。

まず地代論の祖とも呼ぶべきチューネンを取り上げましょう。彼の地代把

握は当時主流であったリカードなどの議論と比べて、決定的に違っている。地代の差というものを土地の肥沃度の違いに求めるのではなく、これを位置の差から説明したわけです。さらにいくつかの作物の違いが生む地代差を示して、それが土地利用を決定していく、つまり、土地利用と地代との規定関係を論理的に示したという点に、重大な意義があると考えます。このような地代と農業立地の関係は、20世紀に入って都市の土地利用モデルに応用されるようになりました。例えば小売業とか工業とか住宅といった様々な土地利用が生む地代には差が存在するため、それぞれの土地利用が地代付け値競争を展開した結果、最も高い地代を負担する土地利用が実現する、というふうに展開されました。それでは、ある特定の土地について見た場合、住宅としての利用価値、すなわち住宅地代はそもそもどうやって決まるのでしょうか。そのメカニズムは二つの要素からなっていると考えられます。一つは家計が負担する輸送費の節約分に由来する「近接度効果」、もう一つは土地利用強度の昂進から結果する「集約度効果」、私はこの二つを概念上しっかり分けて理解することが肝要であると思います。

ここで京阪神大都市圏の事例を用いて検討してみましょう。こういう複核構造を持った都市では影響圏が相互に重なり地価決定の要因を形成していますから、都市経済学が前提とするような「都心からの距離」を計るのが容易ではありません。そこで、3つの中心市の魅力度とそれぞれの都市からの距離を用いたポテンシャルを考え、「加重距離」と名付けました。これを用いると、従来の研究よりはるかに高い精度で地価

勾配曲線を説明することができます。今度は住宅面積と加重距離の関係です。都心ほどアパート・マンションの共同住宅が多く、しかも高層化されている。その結果、縦軸に人口密度を、横軸に加重距離をとってプロットしたグラフは、きれいな距離減衰関係を描きます。これらは私が主張してきました地代の「集約度効果」の一つの例証になると思います。こうした土地利用の稠密化が高い地価を生み出しているのです。では、人口密度の影響を取り除くと地価勾配はどうなるか。1人あたり平均宅地資産額と加重距離をそれぞれ縦軸横軸にとったグラフ、すなわち人口密度一定下での地価勾配曲線に見られる傾きが「近接度効果」の可視的表現だと考えました。

最後に近年の地価バブルについてその動向を検証します。ある地域内の宅地資産総額と地域住民の所得総額の比を考え、ここでは「宅地価格係数」と呼んでおきます。その空間的分布を見ると、1986年ではどこであろうと総所得と総地価が均衡しているということがわかりました。ところが、1988年以降になりますと加重距離に応じて都心に近い方が持ち上がって先ほどまでの均衡が破れ、1990年にかけて格差が急激に拡大しています。特にこの時期関西新空港の開発が行われた泉南の各地で宅地価格係数が高い。重回帰分析を行った結果、こうした1980年代後半の地価インフレーションとも呼ぶべき不均衡は、一つには都心への近接性という構造的要因と、もう一つは新空港という大規模事業という局地的な要因から説明することができます。

本日は、古典的地代論から出発して都市経済学の話をしてきました。そし

て、都市地域における住宅地代はいかにして形成されるかを、「近接度効果」と「集約度効果」の二側面から考察しました。論理的に「近接度効果」が「集約度効果」に先立つ、つまり都心に近いというメリットがあるから土地利用が高度化するわけで、その逆ではありません。都心からの距離にしたがって人口密度が減衰する理由はここにあります。また、二つの効果が相まって地代を決定するのですから、地価曲線が距離減衰パターンをとること、しかもその勾配は人口密度のそれより大きいこともわかりました。さらに、ファンダメンタルズ・モデルというのは少なくともバブル期においては該当していないことが証明できたと思います。ではこれに代わる枠組みが果たしてあるのか、この点については今後研究を深めまして、また機会があればご報告したいと思います。

秋の談話会のご案内

来る11月10日（人文地理学会大会の前日）に、例年のように秋の談話会を開催する予定です。今年は同時にケンブリッジ大学のA. ベーカー博士の講演も予定しています。詳細は改めてご案内いたしますが、日程を御調整下さいますよう御知らせいたします。

◆研究室便り◆

本年度から、文学部の改組に伴い、従来の地理学講座と地域環境学講座が一体化して、新たな地理学講座（大講座）となりました。地理学大講座の中には、地理学（担当成田教授）、地域環境学、環境動態論（担当金田教授）の3分野が設定されています。

また本年度は大阪市立大学から石川義孝助教授が着任されました。学生は大学院修士課程4名、博士課程3名の新院生、10名の新3回生を迎えました。また、大学院博士課程の北内陽子さんが2年間の在コートジボワール大使館所属専門調査員の任を終えて5月に帰国される予定です。

以下は、新3回生の皆さんと、昨秋から在籍する研究生の簡単な自己紹介です。

<3回生>

…浅井俊昭…

引っ込み思案の性格なので、手とり足とりかわいがって下さるようお願いします。大阪の北野高校出身で、スキーが趣味です。

…石原大嗣…

2組出身の石原です。高校は岐阜県立可児高等学校です。京大では、フリークラブというバスケットボールサークルに入ってます。バスケはもちろんスポーツは全般的にプレイするのも観るのも好きです。アルバイトは1回生の時からずっと、都ホテルのルームサービスをやってます。いろんな人と友達になりたいのでよろしくお願いします。

…江下以知子…

平成6年に国史学研究室を卒業して、地理学教室に学士入学してきました。本当のことを言うと、とてもとても緊張していますので宜しくお願いいたします。

4回生の平井さんと同じ石川県の出身ですが、スキーはできません。

趣味は料理です。

…金崎亨子…

皆さんこんにちは、キョーコと読み、亨の字は「人間たる者、完全より一本抜けていた方がよい」という理論に基づき命名され、その通り少しボケてます。サイクリング部に所属し、自転車を足にいろいろと回ってきました。今年の春には（チャリでなく）マレーシアとタイに行きましたがますますアジアに魅かれるこの頃であります。

…嶋野浩一朗…

現在、硬式野球部に在籍しています。そのため、というわけではないんですが、一・二回生の時は年に数コマしか出ていません。そういう私にとって今年の時間割は鬼のように厳しいものですが、根性でのりきるつもりでいます。一年後にはアカデミックな会話をポンポンかましている私がいるはずです。少々ボケますので、ビシバシとツッコンで下さい。

…中鉢奈津子…

名字は「ちゅうばち」と読みます。もともとは文学志向だったのですが、高校の時にとっても面白い地理の授業に出会い、地理をやってみたくなりました。自然地理よりも、人間の社会生活

に関わる地理に興味があります。ネコと土いじりが好きです。

…中川訓範…

はじめまして。いきなりですが、趣味は自転車で坂を下ることです。山登りの好きな人には怒られそうですが、ケーブルカーがあつたりすると登る手間が省けてうれしかったりします。地図を見るのが好きです。それから高い所から街並みを眺めるのも好きです。地理学を選んだ理由はこの2つです。これからよろしくお願いします。

…禾 佳典…

名字の「禾」は「のぎ」と読みます。学士入学で地理学へやって来ました。岡山県出身で、地元岡山の都市のことをいろいろ勉強したいと思います。人見知りしやすい性格ですが、よろしくお願いします。

…野村 創…

福岡県北九州市出身です。今年度、東洋史学科から転科してきました。大学生活も4年目になりますが、今年は勉学に励むつもりです。趣味は登山と旅行で、ぶらぶらするのが好きです。どうか仲良くして下さい。

…山田潤哉…

4回生の遠藤さんと同じバドミントン部に所属の山田です。2年間の浪人生活で家計を苦しめ、そのせいで遠距離通学をしています。それなのに本年度バドミントン部の主務をしていたりします。何を勉強すればいいのかわかりません。定めないままに3回生になってしまい、これからかなり苦労しそうですが、皆様どうぞよろしくお願いします。

<研究生>

…李 禧淑(イ・ヒスク)…

韓国からの研究生の李と申します。韓国では村落のクラン・ビレッジに関して研究していましたが、今はマイノリティの社会文化的側面に興味を持っています。よろしくお願いします。

昨年度の学部卒業生、大学院生の就職・進学先は以下の通りです。

<学部卒業生>

足利亮太郎	大学院文学研究科
板倉小太郎	
大山晃司	大学院人間環境学研究科
門井直哉	大学院文学研究科
川添和明	日本製紙株式会社
祖田亮次	大学院文学研究科
西山隆彦	
林 美歩	中部電力株式会社
吉野修司	鷗友学園女子中・高等学校

<大学院生>

谷口美都子 同志社女子中・高等学校



●1994年度講義題目●

＊講義＊

教授	成田孝三	人文地理学序説
〃	金田章裕	地域環境学概論

＊研究＊

教授	成田孝三	ジェントリフィケーションの諸問題
教授	金田章裕	古地図と景観史(2)
助教授	石川義孝	先進世界におけるわが国の人口移動
人環研	足利健亮	歴史地理学における資料批判
教授		
総人	山田 誠	日本近代都市の地理的諸相
教授		
理学部	岡田篤正	自然地理学(地形学)
教授		
講師	石原 潤	市の地理学的研究
〃	小長谷有紀	モンゴル遊牧文化の構造
〃	大島真理夫	近世農民支配と家族・共同体
〃	竹内淳彦	工業地理学

＊演習Ⅰ＊

教授	成田孝三	地理学研究法Ⅰ
〃	金田章裕	地理学研究法Ⅱ
助教授	石川義孝	地理学研究法Ⅲ

＊演習Ⅱ＊

教授	成田孝三	人文地理学の諸問題
〃	金田章裕	
助教授	石川義孝	

＊講読＊

講師	高橋 正	フランス地理書講読
人環研	豊田哲也	ドイツ地理書講読
助手		

人文研 石川禎浩 中国書講読

＊実習＊

助教授	石川義孝	地理学実習
講師	森 三紀	

＊大学院演習＊

教授	成田孝三	地域の諸問題
〃	金田章裕	
助教授	石川義孝	

●事務局から●

<地理学談話会1994年度会計報告>
(1994年4月～1995年3月)

【資金会計】(単位：円)

収入	年会費	176,765
	繰越金	432,984
計		609,749
支出	運営費への振替	200,000
	次年度へ繰越	409,749
計		609,749

【運営費会計】

収入	資金会計からの振替	200,000
	秋季懇親会会費	115,000
	春季懇親会会費	136,000
計		451,000
支出	秋季懇親会経費	144,465
	論文発表会経費	159,710
	会報等印刷	46,960
	通信・文具等	97,865
	弔電	2,000
計		451,000

<訃報>

前回の「会報」発行以降、次の方々が亡くなりました。つつしんでご冥福をお祈りいたします。

確認分、括弧内の数字は卒業年、敬称略。

青木伸好 (S40) 1994.9
大橋英男 (S 9) 1995.3
神尾明正 (S11) 1995.4
窪田哲三郎 (S29) 1994.12
星野輝男 (S22) 1995.1

<お知らせ>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局まで御一報下さい。(数字は卒業年、敬称略)

尼子 雅一 (S62)
池内麟太郎 (S48)
石角 強 (S45)
今井 平八 (S19)
遠藤 正雄 (S53)
岩部 敏夫 (H3)
岡本 靖一 (S42)
小口 稔 (H3)
加藤 典嗣 (S63)
河口 隆洋 (S56)
児玉高太郎 (H2)
白石 秀俊 (S63)
田島 渡 (S23)
谷田 信夫 (S59)
都子 (S15)
飛田 雅孝 (S49)
西沢 仁晴 (S49)
野田 茂夫 (S36)
林 洋子 (S40)
福田 新一 (S46)
松本 弘史 (S58)

森木 隆浩 (S62)
山下 和久 (S57)
山田 (児玉) 憲子 (S45)

☆今回は5年に1度発行しております談話会名簿を同封いたしました。誤記や変更がありましたら、同封の葉書にてご連絡下さい。

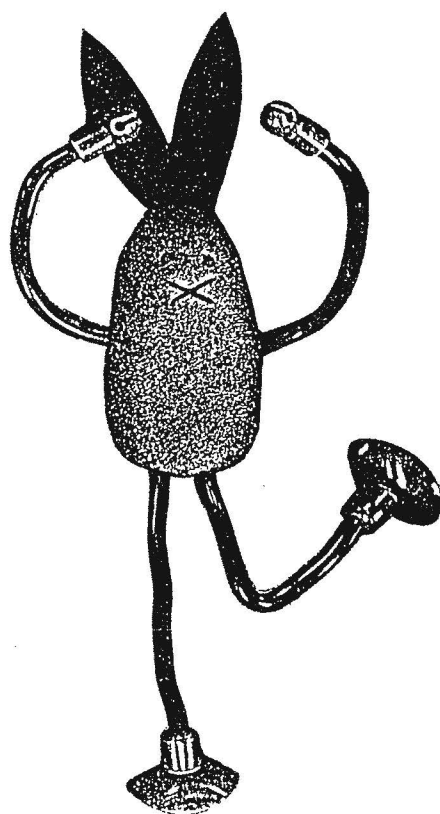
☆本年度の談話会費(1000円)を、同封の振込用紙にてお支払い下さいますよう、よろしくお願いいたします。

【編集後記】

今年は学部生29名、大学院には研究生・聴講生を含めて15名。年々にぎやかになっています。

談話会報と同時に今年度は新しい名簿の発行もおこないましたが、仕事をうまく分担して負担を軽減できたので、ほぼ予定通りに発行することができたと思います。寄稿して下さい方、紹介を書いて下さった方、写真を提供して下さい方ありがとうございました。

編集 亀岡岳志
喜多野宣子
米家泰作
佐藤廉也



会 報 第6号
発行日 1995年5月27日
発行者 地理学談話会
〒606-01
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部地理学教室内
TEL 075-753-2793 (直通)